

各関係機関長 殿
病虫害防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病虫害防除所長
(公印省略)

平成21年度農作物病虫害発生予察情報について

平成21年度農作物病虫害発生予報第14号を発表したので送付します。

平成21年度農作物病虫害発生予報第14号

平成22年3月18日
徳島県

.果樹

果樹共通

果樹カメムシ類

1) 予報内容

発生時期 平年よりやや早い

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 前年夏～秋期における予察灯への果樹カメムシ類の誘殺数は、平年よりやや少なめで推移した。

(2) 1月に実施した果樹カメムシ類の調査(11地点×2ヶ所調査)では2地点で越冬を確認、越冬成虫数は0.09頭/㎡であった。一昨年(越冬虫を認めず)、昨年(11地点×2ヶ所の調査では2地点で越冬を確認、越冬成虫数は0.23頭/㎡)と比べて越冬密度が低い。

(3) 3月12日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並～高い、降水量は多い、日照時間は少ないと見込まれている。

.野菜

冬春キュウリ

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや多い)で、発生量は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月の巡回調査では、一部に多発生圃場もみられるものの、発生圃場率が66.7%、発病葉率が13.7%であり、ほぼ平年(59.2%, 10.6%)並の発生である。

(2) 3月12日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並～高い、降水量は多い、日照時間は少ないと見込まれている。

3)防除上注意すべき事項

- (1)発生が多くなってからでは防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (2)罹病葉は早期に圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3)同一系統薬剤の連用は耐性菌出現の恐れがあるので避ける。

灰色かび病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

- (1)3月の巡回調査では、発生圃場率が16.7%、発病果率が1.0%であり、ほぼ平年(5.5%、0.5%)並の発生である。
- (2)3月12日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並～高い、降水量は多い、日照時間は少ないと見込まれており、やや発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

- (1)気温が20 くらいの低温で多湿の時に発生しやすい。特に湿度の影響が大きいので、施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2)朝夕の急激な冷え込みは発生を著しく助長するので、適切な温度管理に努める。
- (3)発病果や花弁などは伝染源になるので、できるだけ早く除去し、ハウス外で処分する。
- (4)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (5)耐性菌出現の恐れがあるので同一系統の薬剤の連用は避ける。

べと病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生量は「中」

2)予報の根拠

- (1)3月の巡回調査では、発生圃場率が83.3%、発病葉率が16.2%であり、ほぼ平年(60.5%、20.8%)並の発生である。
- (2)3月12日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並～高い、降水量は多い、日照時間は少ないと見込まれており、やや発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

- (1)施設内が過湿にならないように換気を図る。悪天候が続いたりして十分な換気ができない場合には、暖房機のファンを作動させて、ハウス内の多湿化を防止する。また、灌水過多にならないように注意する。
- (2)肥料切れや着果過多などで樹勢が衰えた場合に激発するので、肥培管理に注意する。
- (3)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬剤散布は、葉の裏側を重点的に行なう。
- (4)耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

- (1)3月の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が3.5%、寄生葉率が0.05%)。

3)防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

オンシツコナジラミ

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

- (1)3月の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が9.7%、寄生葉率が0.6%)。

3)防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。また幼虫は葉裏に多く寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ミナミキイロアザミウマ

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

- (1)3月の巡回調査では、発生圃場率が50.0%、寄生葉率が2.3%であり、ほぼ平年(16.8%、2.5%)並の発生である。

3)防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2)花器、新葉、葉裏、葉の重なった部分などに集まる習性があるので、それらの部分に薬液が十分かかるよう、丁寧に散布する。
- (3)薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春ハウレンソウ

べと病

1)予報の内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2)予報の根拠

- (1)3月の巡回調査では発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が10.5%、発病度が0.5)。
- (2)3月12日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並～高い、降水量は多い、日照時間は少ないと見込まれており、やや発生助長的な気象条件である。

3)防除上注意すべき事項

- (1)品種は、本病レース1～7に抵抗性があるものを利用する。
- (2)葉が繁茂すると被害が多くなるので、肥培管理に注意する。
- (3)春先の病勢の伸展を抑制するため、薬剤は予防的に用いる。
- (4)薬剤は予防的に、また下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に散布する。
- (5)罹病株を圃場に放置すると、次作の第一次伝染源となるので、発病株は速やかに処分する。また、春先に萎縮して奇形となった株はべと病に感染しているので、速やかに処分する。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年よりやや多い),発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では発生圃場率が100%,発生程度指数が4.0であり,ほぼ平年(61.1%, 4.0)並の発生である。
- (2) 3月12日発表の1ヶ月予報では,気温は平年並~高い,降水量は多い,日照時間は少ないと見込まれている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので,薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので,同一系統の薬剤の連用は避ける。

冬春イチゴ

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では,発生圃場率が7.1%,発病葉率が0.7%,発病果率が0.1%であり,ほぼ平年(4.6%, 0.2%, 0.5%)並の発生である。
- (2) 3月12日発表の1ヶ月予報では,気温は平年並~高い,降水量は多い,日照時間は少ないと見込まれている。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので,初期防除に努める。
- (2) 古葉を早めに除去し,葉裏に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (3) 罹病した果実や茎葉などは早期に見つけ,除去した後圃場外に持ち出し,病原菌密度の低下に努める。
- (4) 薬剤感受性の低下を回避するため,同一系統の薬剤の連用は避ける。

灰色かび病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年よりやや多い),発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 3月の巡回調査では,発生圃場率が21.4%,発病果率が1.6%であり,平年(6.2%, 0.3%)と比べてやや発生が多い。
- (2) 3月12日発表の1ヶ月予報では,気温は平年並~高い,降水量は多い,日照時間は少ないと見込まれており,やや発生助長的な気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温が20 くらいの低温で多湿の時に発生しやすいので,施設内が過湿にならないように換気を図る。
- (2) 発病果は伝染源になるので,速やかに圃場から持ち出し処分する。
- (3) 薬剤感受性の低下を回避するため,同一系統の薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年よりやや多い),発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が35.7%、寄生株率が7.7%であり、平年(9.1%, 1.1%)と比べて発生が多い。一部に激発圃場も見受けられる。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

平年並～やや多く(前年よりやや少ない)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 3月の巡回調査では、発生圃場率が71.4%、寄生葉率が7.9%であり、平年(37.0%, 6.7%)と比べてやや発生が多い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性の発達をもたらす恐れがあるので、同一系統の薬剤の連用は避ける。

その他

1) 水稻の育苗や甘藷の圃場準備等が始まり、農薬を使用する機会が多くなる時期です。農薬による危被害、事故等を防ぐためにも、使用時には周辺環境に配慮した上で取り扱うとともに、使用残農薬、廃液等は適切に処分して下さい。

2) 水田に薬剤を使用したときは、7日間以上止水して下さい。

3) 薬剤の使用に当たっては必ず使用基準を遵守し、周辺作物等へ飛散しないようにして下さい。

発生量の表示

発生程度：甚>多>中>少>無

発生量：多い>やや多い>並>やや少ない>少ない

徳島県立農林水産総合技術支援センター病害虫防除所

テレホンサービス：0883(26)1199

URL：<http://www.green.pref.tokushima.jp/boujyosyo/>

病害虫の発生予察情報、発生状況、防除法等をお知らせしています。